

グローバル化に伴う植民地主義とナショナリズム

西川長夫

はじめに

私の報告のタイトルはこのシンポジウムのテーマに合わせて「グローバル化に伴う植民地主義とナショナリズム」とさせていただきます。「グローバル化に伴う植民地主義」というのは前回の漢陽大学におけるシンポジウムやその直後に行われた立命館大学における連続講座のテーマです。最後に「ナショナリズム」を付け加えたのは、新しい植民地主義の問題をふまえながらも今回は視座を、同じく東アジアの、ひいては世界の、緊急の課題である「ナショナリズム」の方に移動させようという意図を表しているにご理解ください。それは植民地主義の問題をひとまず切り離して、今度はナショナリズムの問題を論じようと言うのではなく、両者を相関連したものとして論じることが、私たちが現在、その中にまきこまれている歴史的な現実を理解するためにより有効であろうと考えているからです。

したがってここでは「グローバル化」「植民地主義」「ナショナリズム」という、いずれも大きくて重い、口にするのも憚るような三つの用語が問題になります。もっとも私はこれらの用語にかかわる問題について幾度も文章を書き、先の漢陽大学のシンポジウムや立命館の連続講座でも発言しているので¹⁾、今日の報告はその要約の上に何かを付け加えるという形をとらざるをえないことをお許しください。

1

現在進行中のグローバル化について現時点で決定的な定義を与えることはできないと思います。グローバル化について、私はこれまでグローバル化を大きく三つにわけ、三つの歴史的な時間の重層的な流れとして考えることを提案してきました。第一は、人類史が始まって以来今日まで続いているグローバル化の流れで、これは社会を作りコミュニケーションを求める人間の本能に基づくものでしょう。私はそこに人類の未来と可能性を見たいと思っています。第二は、16世紀の大航海時代以来顕著になった西欧の膨張によって始まり地球の大部分を植民地化したグローバル化の流れで、これは近代国家の形成や資本主義の発展に、そしてナショナリズムと植民地主義に、直接つながる歴史的な流れです。グローバリゼーションという用語が普及するのは90年代に入ってからですが、この第三の、現在、グローバリゼーションと呼ばれている流れの起点を、私は最後の古典的な反植民地主義闘争であるベトナム戦争が戦われ、反戦運動や公民権運動、さらには世界同時多発的な学生運動が行われる一方で、資本主義の変質を予告する多国籍企業の拡大や金融危機が始まった60年代後半に置いて考えています。

今回の私たちのシンポジウムのテーマは、この第二のグローバル化と第三のグローバル化の間にどのような断絶と変化があったか、あるいは第二のグローバル化と第三のグローバル化の流れがどのように重層的に重なり合い、または混在しているか、という問題として解釈することができるのではないかと思います。私の「〈新〉植民地主義論」は、〈私たちはなぜ植民地主義を対象化して考えることができなかつたのか〉という問いと反省から出発していますが、他方で冷戦構造崩壊後、そしてとりわけ2001年の9.11事件以後アメリカ主導の下にいっそう顕著になった新しい形の世界の二極化——すなわち対テロ戦争の口実の下に行われる政治的軍事的二極化と同時に、世界の貧富の差、つまり所得格差の急激な拡大によって特徴づけられる社会的経済的二極化の複合現象——が進行していく状況の中で、植民地主義の変容を確認し「第二の植民地主義としてのグローバル化」「植民地なき植民地主義」という結論に導かれました。このグローバル化の深刻な側面はある程度の情報を得ている人々には、ほとんど自明の現実ですが、だれもそれを植民地主義の名で呼ぼうとしない。もしこれに植民地主義の名を与えたとき何が見えてくるか、それを問うのが「〈新〉植民地主義論」の試みの一つでした²⁾。

ナショナリズムの場合はどうでしょうか。「グローバル化に伴うナショナリズム」という問題設定の下で見えてくるのは何でしょうか。漢陽大学の報告では時間が足りなくてこの部分は省略してもらいましたが、後に韓国の『批評』誌に再録するに当たって私は一章を加え、それに「グローバル化に伴うナショナリズム」というタイトルをつけました³⁾。その中で私は一つのエピソードとしてイギリスの著名な歴史家E・J・ホブスボームが1990年に出版した『1780年以後のネイションとナショナリズム』（邦訳「ナショナリズムの歴史と現在」）の中で、ナショナリズムの時代は終わったと宣言し、その2年後に出した新版で前言を撤回したことを述べています。

このエピソードは、ナショナリズムの最良の研究者さえも、ナショナリズムの終焉を明言するような歴史的な時点があったこと、そしてその予想は直ちに東欧の社会主義圏とソ連邦の崩壊によって、さらにはグローバル化の急激な進行によって裏切られたことを示しています。そして私たちはいまありとあらゆる種類のナショナリズムが開花し隆盛をきわめる時代のただなかにいます。冷戦構造の崩壊の原因が体制内の諸矛盾に由来することは言うまでもありませんが、グローバル化の大きな流れの中でそれが起っていることも否定できません。1990年代以降に顕著になる新しいナショナリズムの潮流の始動力はグローバル化であり、それを「グローバル化に伴うナショナリズム」と呼ぶことは許されると思います。

2

私がかつてグローバル化に伴うさまざまなナショナリズムの全体的なイメージを描くために、その類型化を試みたことがあります。極めて初歩的な素描にすぎませんが、ここで改めてその文章を引用させていただきます。

「境界の侵犯であり、ネイションに対する攻撃であったグローバリゼーションが、つねにナショナリズムを伴い、ナショナリズムを必要としてきたという背理と矛盾、グローバリ

ゼーションは、世界の各地に、その時々状況に応じてありとあらゆる形のナショナリズムを呼び出してきた。そのいくつかを列挙してみよう。

第一に、グローバル化の起点あるいは中継地となる先発諸国の場合 (1) グローバリゼーションを法的制度的軍事的に支える国家の側が押し出す、グローバリズムと一体化したナショナリズム。(2) 左翼・反対派による福祉国家の維持・回復を求めるナショナリズム。(3) 極右政党による移民排斥や人種差別主義。(4) 増加の一途をたどる移民たちの複雑で屈折したナショナリズム(アンダーソンの言う「遠隔地ナショナリズム」もここに含まれる)。(5) 先住民たちの独自の抵抗的ナショナリズム。

第二に、後発諸国にもこの5項目に対応するナショナリズムが想定される。(1) 開発独裁や経済特区といった形で現れる、グローバル化を受け入れる一方で強化されるナショナリズム。(2) グローバル化に抵抗しつつ反対派が抱く国民国家形成の願望としてのナショナリズム。(3) 西欧的な価値への反発や伝統的な宗教と結びついた原理主義的ナショナリズム。(4) グローバル化の波によって活躍するエリートの移民と資源のとほしい後発国の重要な輸出品目の一つとして送り出される貧しい移民たち(例えばフィリピンの女性労働者)の置かれた立場から生み出される多様で複雑なナショナリズム。(5) 少数民族や先住民の問題は、旧植民地である後発国においていっそう深刻で過激な形をとることがありうる。

第三に、旧社会主義圏の崩壊後に各地で発生した民族紛争は、原理的に何か新しい事態や新しいナショナリズムの発生であるというよりは、それまで物理的イデオロギー的な圧力によって抑圧隠蔽されていたものが表面化したと考えられる場合が多い。社会主義圏の崩壊がわれわれの目前に明らかにしたのは、社会主義国家もそのイデオロギー的装いを剥ぎ落としてみれば、結局は自由主義国家と同じ国家の論理が貫通する国民国家であり、その崩壊をもたらしたのは、結局は世界的なグローバリゼーションの波であったということだろう。

第四に、冷戦構造あるいはそれ以前の帝国主義時代の植民地分割、等々の遺制としていまだに残る、分断された民族や国家におけるナショナリズム。】(『(新) 植民地主義論』第八章「未明の地平への歩み」P.245～246)

こうしたグローバル化時代のナショナリズムは、同じ国家至上主義的なレトリックを用いているが、ネイション形成期のナショナリズムとは異なり、ネイション衰退期の、基盤を失ったノスタルジックな、いわばネイションなきナショナリズムであるが、それだからといって現実を動かす力が欠けているわけではありません。

グローバル化が生活様式の変化を強いるだけではなく、上層と下層の分離、中核と周辺の格差の拡大、中核による周辺の搾取と抑圧を伴う以上、つまりグローバル化が第二の植民地主義として作用する以上、グローバル化は必然的に反グローバル化運動を呼び起こさざるをえません。そして反グローバル化運動の多くはナショナリズムによく似た形をとる。そこにはかつて植民地支配に苦しんだ人々の反植民地主義闘争がナショナリズムの形をとったのとよく似た状況が認められます。だが重要な違いにも注目すべきでしょう。いまグローバル化を受け入れ

ローバル化を積極的に推し進めているのは多くの場合、その国の政府と資本であるからです。そしてグローバル化を推し進める側のナショナリズムとそれに反対する側のナショナリズムが存在する。

ここでナショナリズムの定義とグローバル化の中の国家の役割が問題になると思います。ナショナリズムという言葉の起源は18世紀の英・仏であったようですが、ヨーロッパにおいてもそれが広く用いられるようになるのは19世紀後半で、しかも英、仏、独、伊、等々の言語によって微妙に意味が異なり、また同じ国や同じ地域の中でもそれに対する立場によって、あるいは時代によっても意味が異なる、したがって定義の極めて困難な言葉であると思います⁴⁾。あえて定義すれば、「ネイションに最高の価値を認めネイションの統一と独立と発展を求める思想と運動」とでも言えばよいのでしょうか。日本では、民族主義、国民主義、国家主義、国粋主義などと訳されています。多数の訳語があるということは、原語とのずれのみならず、同じ1国においても時代や場所、あるいは立場によって変るナショナリズムの多様性を表しているのではないのでしょうか。

3

歴史的に見ればナショナリズムが勃興する5つの時代、5つの転機があったと思います。第1は、フランス革命（ジャコバン・ナショナリズム）とナポレオン戦争の時代、つまりヨーロッパにおける旧制度の崩壊とそれに続く国民国家形成の時代です。第2は、19世紀後半の帝国主義と植民地分割＝支配に至る時代。第3は第一次世界大戦とオーストリア＝ハンガリー帝国の崩壊と再編の時代。第4は、第二次世界大戦とその後の列強による植民地支配体制の崩壊。そして第5は、私たちが現在直面しているグローバル化と冷戦体制（戦後レジーム）の崩壊。

こう並べてみるとナショナリズムが盛んになるのはいずれも、旧制度の崩壊と新制度の形成、つまり近代（国民国家の時代）の重大な転換点であることがはっきりすると思います。歴史の完全な断絶や忘却はありません。私たちはこの5つのそれぞれの時代にそれに先立つ時代の痕跡と新時代への動きを見出すことができます。だが同時にそこで起きている根本的な変化も、見逃してはならないと思います。第4の時代、つまり戦後の前半期は、後発諸国（第三世界）の民族独立運動（植民地支配からの解放）があり、また先発諸国（戦勝国も含め、そしてとりわけ敗戦国）では、戦後「復興」の名のもとにネイションの再建が行われ、ナショナリズムの価値が疑われることのない時代でした。いま私たちが直面している第5のグローバル化の時代は、それまで続いていた近代の国家と資本の力関係の均衡が破れ、資本主義の変質と同時に国家の変質（「国民国家のゆらぎ」などと呼ばれています）が急激に進行しています。

国家はかつてのように資本を抑制する力を失い（「福祉国家」の終り）、むしろ（国際）資本の受け入れに専念する（自由市場、規制緩和、資本導入のための法整備、等々）。その結果は国民の階層分解（中間層の解体、新富裕層の形成と貧困層の拡大、家族の変容、ホームレス、ニートとワーキングプアの発生、等々）となって現れます。また移民と外国人労働者の流入は、貧困層の拡大と地域コミュニティの解体に拍車をかけます。国民国家の理念は定住社会にもとづいていますが、科学技術の発達と資本の要求は移動と移住を原理とした社会形成を求めています。

す。これに対して国家はグローバル化を受け入れると同時に、国民に対し国際競争力の強化をめざす再統合を要求し、愛国心の高揚に努めるという相矛盾した役割を担うことになります。

ではグローバル化に伴う新しいナショナリズムはどのような特色をもつことになるのでしょうか。ナショナリズムの特色を国単位で論じることはもはや不可能でしょう。新しいナショナリズムを論じるためには、社会変化や階層分化の細部にわたる考察と人々の内面における微妙な変化を見逃さない視座の設定が必要です。だがここでは個別研究に立ち入ることはできないので、新しいナショナリズムに顕著な特色の幾つかを列挙することにとどめたいと思います。

第1は、ナショナリズムの単位あるいは準拠集団の多様性、その細分化と拡大。—ナショナリズムが必ずしもネイション（国民国家）を準拠集団としない傾向。細分化の例としては、欧米の各国に見られる地域主義（リージョナリズム regionalism）、アフリカの部族間対立、さらにはメールや携帯電話など新しい科学技術を媒介にした、孤立して不安な諸個人を結びつける若い世代のナショナリズム。拡大の例としてはEU（欧州連合）やASEAN（東南アジア諸国連合）のような広域にわたる地域連合、国境を越えた言語・文化・宗教などを介した結合（フランスを中心にしたフランコフォン francophone の集り、近東諸国のナショナリズムからアラブ＝イスラムナショナリズムへの動き、等々）、さらには現在の世界の二極化や貧富の格差を背景にしたかつての第三世界主義に代わる反グローバル化運動、いわゆる「マルチチユード Multitude」⁵⁾のナショナリズムの可能性、等々が考えられます。

第2の特色として、ある特定の事件に対するナショナリスト的反応と広がりやすさ、過激さ、不安定さ、あるいは意外性などが指摘できると思います。そこには人々の自発性と権力による情報操作の可能性との危うい結合が認められます。この種のナショナリズムは、上記の準拠集団の多様性と同時に、グローバル化の特色である時間と空間の短縮がかかわっているのではないのでしょうか。情報の正確さやその意味を十分に吟味する時間を欠いた直接的で過激ないわばポピュリスト (Populist) 的反応が認められます。新しいタイプの「群集」の誕生とすべきでしょうか。

第3に、移民や弱者を相手にして発揮されるナショナリズム。支配の側にある富裕層のナショナリズムと貧困層のナショナリズムの対抗という大きな図式は考えられるとしても、同時に富裕層のなかの対立、貧困層のなかの対立が存在する。とりわけ貧困層のなかの不安や不満が同じ貧困層に属する移民や弱者（外国人、身障者、ホームレス、等々）に対するナショナリスティックな言動や暴力となって現れることが注目される（ドイツのスキンヘッド、フランスの郊外問題、カナダやオーストラリアあるいはアメリカなどのいわゆる多文化主義国における移民の子弟いじめ、日本における在日韓国・朝鮮人いじめ、さらには移民による移民差別（ロサンゼルス暴動、等々）。支配の側の政策の犠牲者たちが支配の側のナショナリスティックなイデオロギーの熱狂的な支持者として現れることも、グローバル化の進んだ国々に見られる共通の現象です。

第4に、東アジアにおけるナショナリズムの特色とその中で日本が果たした役割についてです。東アジアのナショナリズムの主流は欧米列強と、後にその一端を占める日本の帝国主義＝植民地主義に対抗するナショナリズムでした（もっともそれぞれの国や地域に深く分け入って考察すれば、事態はより複雑ですが、その問題はここでは省略します）。日本「帝国」は近代における（そして現在に至るまで）東アジアの秩序の攪乱者でした（だが日本によって攪乱され破壊

された旧秩序とは一体何であったのかという疑問が残りますが、この問題もここでは省略せざるをえません。日本「帝国」は単に秩序の攪乱者であっただけではなく、侵略戦争と植民地支配によって東アジアあるいは東南アジアの全域に多大な深刻な被害を与えたことも事実です。戦争と植民地支配の責任は追及されなければなりません。だが世界の現状において、責任の徹底的な追及ははたして可能でしょうか。これまで戦争責任の徹底的な追及は、被害を受けた国においても被害を与えた国においても行われはしなかったと、私は思います。戦争が国益追及の手段として認められ、戦争における殺人が英雄的な行為として国家と国民によって称えられている限り、戦争責任が徹底して根底的に問われることはありえません（関東軍731部隊の毒ガスや細菌戦、人体実験などの犯罪が、東京裁判で告発した判事が（レーリンク）いたにもかかわらず、米政府の圧力で不問に付されたことを思い出します）。そして徹底的な追及が行われない限り、その記憶は反日的ナショナリズムを繰り返し呼び起こすことになるでしょう。

「謝罪」の問題はどうでしょうか。私は従軍慰安婦の問題も含めて、戦争責任や植民地支配の問題は「謝罪」で終わるべきではないと思います。心からの「謝罪」がなされるべきでしょう。私はありうるべき「謝罪」の文章を考えてみましたが、それが不可能であることに思い至りました。個人や集団の責任もあることは言うまでもありません。だが最終的に問われるべきなのは言葉ではなく、そうした事態（支配と抑圧、収奪や差別、暴力、等々）をもたらしめた国家の構造、さらにはそれを含む世界全体の構造であって、もし「謝罪」で終われば、結局はそうした事態を生み出した根底的な構造をそのまま放置温存し、再び同様の事態を招くことになるでしょう。そしてそれはまさしく現在の日本で起こっていることです。この問題のお手本とされるドイツの場合も、この点では大差ないと思います。また現在の国家構造すなわち国民国家体制とそれを保障するイデオロギーを維持するという点においては、東アジア諸国はむしろ共犯関係にあるのではないのでしょうか。（これは私が長年、国民国家批判として述べてきたことです）。

4

東アジアの問題に関してもう一つ、言語の問題を付け加えさせていただきます。もし東アジア共同体を考えるとすれば、その基本的な要素として東アジアの諸国が漢字圏に属しているということが挙げられます。私はこれまでつとめてナショナリズムという言葉を使い漢字の民族や民族主義を避けてきました。ご存知のように「民族」は Nation や Folk の訳語として明治の後期（日清・日露戦争が行われた世紀転換期）に定着した訳語です。「民族」という訳語が定着するまでには、「民種」「種族」といったいくつかの訳語が試みられています。東アジアの近代化は、西欧から輸入されたさまざまな領域（政治、経済、哲学、文学、科学技術、等々）の用語の、漢語による訳語を使って行われました。その訳語の多くは明治期の日本で行われ、当時の日本はまるで訳語工場のような印象を与えます。「文明」や「文化」などもそうだと思いますが、訳語の多くは中国の古典に出てくるもので、古典における用語とは異なる意味を与えられ（意味の継続と断絶）、面目を一新して訳語として認められました。こうした訳語の多くは日本で作られ、中国をはじめ漢字圏に逆輸出（入）されました。「文明」や「文化」はその典型的な一例ですが、「民族」の場合は中国の古典には無く、日本で作られた「民」と「族」

の合成語でした。中国における「民族」の最初の使用者は孫文であるというのが一時期の通説であったようですが、これは最近の中国における実証的研究で否定されています。「三民主義」以前に日本の新聞記事の紹介などで「民族」が使われたようです。こうした用語のたどった歴史的過程は今ではほとんど忘れられていると思いますが、例えば現在の中国における「文明」キャンペーンや「民族」熱の記事を読むと私は複雑な感情にとらわれてしまいます)。ここで私の言いたいことは少し入り組んでいて複雑ですが、第1に東アジアには、それが住民にとって幸福であったか否かは別として、すでに共有されてしまった近代があるということです。日本におけるこうした近代的用語の翻訳は西欧の受容と同時に西欧に対する反抗の手段ともなりうるものでした。日本における西欧の言葉の翻訳が漢語を用いて行われたことは、日本における西欧の受容は東アジアの伝統に基づいて行われたことを意味しますが、日本からの漢字圏への翻訳語の輸出は、東アジアの近代化の契機でありえたと同時に、日本による東アジアへの侵略や植民地化と表裏一体のものでした。そして植民地の解放は「民族独立」の名において行われました。だが「民族独立」が達成された後はどうなったのか。グローバル化時代の植民地主義において、「民族」は「資本」や「格差」や「国家権力」を覆い隠す役割を果たしていないだろうか。これが私の最近の疑問です。最近韓国で議論されている「植民地近代」の問題を、こうした翻訳語の観点から改めて論じることができると思います⁶⁾。

第2に、「民族」あるいは「民族主義」というのは正しい訳語だったのでしょうか。「国民主義」という訳語もありえたでしょう。私たちはまず、東アジアの諸国の間で、あるいはそれぞれの国の中でも立場によって、「民族」という語に与えられた意味内容が微妙に異なっていることに注意すべきだと思います。それはナショナリズムに関する相互理解の第一歩だと思います。だがもう一歩進めて、「民族」という概念の導入(あるいは創出)は、東アジアの住民にとって、あるいは人類にとって幸福であったのでしょうか。「グローバル化に伴う植民地主義とナショナリズム」というテーマは最終的にはこのような疑問に私たちを導いてゆくのではないかと思います。

5

最後に、日本の問題で現在、私が最も気がかりなことを一つだけ述べさせていただきます。それは安倍前首相の言葉を使えば「戦後レジームの脱却」にかかわる問題であり、鶴見俊輔の言葉を用いれば、戦後を通じて国家の強制を感じさせることなく進行していった全国的な「転向」の問題です。安倍晋三が戦前の満州国(したがって大東亜共栄国)建設の首謀者の一人であり、A級戦犯から甦って戦後の新安保体制の確立を推し進めた1960年の首相岸信介の孫であることは周知の事実です。安倍は祖父の岸を尊敬し、岸の政治理念を受け継ぐことを公言しており、それは、「戦後レジーム(から)の脱却」のスローガンの下に、憲法や教育基本法の改正、新自由主義的な政策の推進、等々の政策に現れています。自由民主党と安倍政権は今回の7月の参議院選挙で選挙民の痛烈な反撃を受け、安倍首相は辞任に追いこまれました。しかしここで忘れてはならないのは小泉から続く安倍政権は、「東アジア」にかかわる全国的なナショナリズムによって成立しているということです。首相の靖国神社参拝の支持者は50%を越えてい

ました。その他、慰安婦問題、教科書問題、国境問題、等々、日本政府の権威的戦前回帰的な対応が呼び起こした東アジアの反日運動が、逆に日本のナショナリズムを呼び起こし、さらにそれが保守政権にかかわる政治家たちの暴言を生み出すという事態が繰り返されています。安倍政権の場合、政権を担うには未熟さが指摘されていた人物が、国民的人気を理由に首相の座を得た最大の理由には、彼が北朝鮮との拉致問題の交渉の前面に立ち、つねに強硬な姿勢をつらぬいたことが挙げられます。現在、拉致問題を中心に、戦後最大の反・北朝鮮、そしてさらには反・朝鮮人キャンペーンが繰り返されており、その直接の被害者は在日朝鮮・韓国人ですが、いまジャーナリズムや言論界でこのキャンペーンを批判したり反対する者は一人も見あたらぬ。天皇制批判と同じくらい完全なタブーが支配しています。こうした政治的動向の背後にあって進行しているのが鶴見俊輔の言う、全国民的な「転向」です。「転向」というのは1930年代、日本が15年戦争に突入してゆく時代に国家権力の強制によって大量に発生した共産主義者や自由主義者の国家主義、日本主義への思想的「転向」を発端としていますが、さらにその背後には近代の後発諸国に共通の問題、つまり西欧受容に際しての欧化主義と土着主義（国粹主義）の対立葛藤、西欧的近代をいかに乗り越えるかという「近代の超克」の問題があります。日本では開国（1854年）以来、欧化主義が支配的な時代と日本回帰（土着主義）が支配的な時代がほぼ20年のサイクルでくりかえされていますが、「転向」はその日本回帰（したがってナショナリズム）の時代の一つの際立った現象とみなすことができます⁷⁾。鶴見俊輔をはじめとする「思想の科学」グループを中心にして行われた「転向」の共同研究は、戦後の思想史研究の最も輝かしい成果と言ってよいものですが、しかしこの共同研究は戦後の欧化主義（戦後デモクラシー）の時代の、一般に、主義に殉じた非転向のみが正しいとみなされた時代のイデオロギー的潮流のなかで行われており、鶴見たちが出した『転向再論』（鶴見俊輔、鈴木正、いいたももの三人による共著、2001年、平凡社）は、その40年後に反省と自己批判をこめて「転向」にかんして開けた新しい知見を記した書物です。この書物に含まれているさまざまなメッセージのなかで、私がいまここで特に皆さんにお伝えしたいメッセージは次の三点です。

1. 非転向に限らず、偽装転向やくりかえされる転向も含めて、まともな人間の生き方がありうる（鶴見はアイデンティティに代わるインテグリティの概念を提案しています）。
2. 戦後期を通じて国家の強制を感じさせない全国民的な「転向」が進行している。（鶴見はこの書物に寄せた文章に「国民というかたまりに埋め込まれて」という意味深いタイトルを与えています）。
3. この現在進行中の全国民的な「転向」を見すえる視座の欠如（この絶望的な状況について鶴見は書いています — 「戦後のすでに五十五年におよぶ、国家の強制を感じさせない形で進む転向を見すえることは、一つの課題である。しかし、これは難しい。研究者の胸中に今進んでいる転向を見すえる動機がないからだ。」（P. 27） 鶴見はさらに次のようにも述べています。 — 「このようなアメリカの学問の一部に組み入れられることをグローバルな学問と見なしている日本の学問は、日本人の「転向」を研究する手がかりを次第に失ってゆく」（P. 29）。

この三項目にかんしては、さらに多くの説明と多くの議論を必要としますが、ここでは断念

せざるをえません。私はここではこの書物について書かれた優れた書評の末尾の一節を引用し、このような危機意識を私も共有していることを記すだけにと止めておきたいと思います。

「だれもが同調して雪崩をうつ時代は、そう昔ではない。遠い先のことでないように思える」(外岡秀俊「国民挙げての「宙返り」再び?」,「朝日新聞」2001年5月27日)。この書物が9.11直前に出版されていることは、この書物の予言的な性格をいっそう強く印象づけていると思います。

注

- 1) 特集1「国民国家と多文化社会」第17シリーズ「グローバリゼーションと植民地主義」, 特集2 植民地主義研究会研究報告「グローバリゼーションと植民地主義」を参照されたい(『立命館言語文化研究』19巻1号, 2007年9月)。
 - 2) 西川長夫『〈新〉植民地主義論—グローバル化時代の植民地主義を問う』平凡社, 2006年。
 - 3) 『批評 (비평)』14号(2007年春号), 日本語版は注1に記した「特集2」pp.221-224。
 - 4) Raoul Girardet, *Nationalismes et Nation*, Editions Complexe, 1996. [ラウル・ジラルデ, 中谷猛・川上勉・長谷川一年訳『現代世界とさまざまなナショナリズム』晃洋書房, 2004年。]
 - 5) アントニオ・ネグリ/マイケル・ハート, 幾島幸子・水島一憲・市田良彦訳『マルチチュード』(上・下) NHK ブックス, 2005年。
 - 6) この問題にかんして最近きわめて興味深い示唆に富んだ書物が、私たちのシンポジウムとほとんど同じ時期に出版されている。以下その序説「〈植民地的主体〉への追求—隠蔽と構築のポリティックス」から引用させていただきたい。——「概念的装置のメディア作用のなかでも、植民地期の文化移動という文脈において、注目しなければならないのは、近代初期の日本語の移植問題である。周知のように、明治期に行われた西洋書に対する日本語翻訳語が、短時間で多量に朝鮮半島の知的、メディア的環境の中に移植され、一般化した。(……)日本の幕末・明治期翻訳語知識人の価値判断によって導き出された単語や合成語の翻訳造語が、ほぼ四千から六千語程度、集中的に朝鮮半島の文化状況に流入されたとされている。ほんの一世紀前に行われた、このような朝鮮半島の人々の認識の地殻変動は、ある意味では、物質的、制度的装置のメディア作用に比べ、より根本的であろう。注目に値する日・韓の近代化比較文化の中心問題の一つなのである。しかし、現在の朝鮮語、あるいは現代の韓国文化は、それらの概念が流入・移植されることによって行われた主体変容のメディア作用に対してあまり切実に記憶しようとはしない。」(鄭百秀『コロニアリズムの超克—韓国近代文化における脱植民地化への道程』草風館, 2007年10月)
- ここに記された鄭百秀の議論はリディア・リュウの次の書物に付された翻訳造語、借用語の目録に依拠している。Lydia H. Liu, *Translingual Practice: Literature, National Culture, and Translated Modernity - China, 1900-1937*, Stanford University Press, 1995。なお私自身はこの問題を、1996年9月23日に台湾国立精華大学の社会学院亚太文化研究センターで行った講演で提起したことがある。——「漢字文化圏における文化研究—文明・文化・民族・国民の概念をめぐって」(『国民国家論の射程—あるいは〈国民〉という怪物について』柏書房, 1998年, 所収)
- 7) 「欧化主義と日本回帰」は40年来の私のテーマであり、私はすでに『国境の超え方』(1992年), 『地球時代の民族=文化理論』(1995年)などでも論じてきたが、最近これらの単行本に収められていない論考を集めて「再論」を試みた。参照いただければ幸いです。——『日本回帰・再論—近代への問い, あるいはナショナルな表象をめぐる闘争』人文書院, 2008年。

